

十歳の悪夢 「沖縄戦」

著者 謝名堂 昌信

米軍は1945年4月1日に沖繩本島中部西海岸の嘉手納・北谷に上陸、2日後には東海岸に進出し、本島を南北に二分した。北部はほとんど抵抗なしに4月19日には完全に制圧され、北に避難した住民の殆どは早い時期に難民として收容されたが、米軍の説得に応じずにジャングルにとどまった人たちの多くは飢餓に倒れた。一方、南部での戦いは熾烈を極め、被害も甚大だった。米軍の上陸地点から南西に約12 kmに位置する中城村に住んでいた私たち一家（祖母、母、二人の兄、当時十歳の私、二人の妹と一歳の弟）は、当初、米軍の猛烈な艦砲射撃を避けて、村の北側丘陵地の壕に他の近隣の村人と共に避難していた。一五歳以上の若い人たちはもとより、元氣であれば年寄りも防衛招集の名で動員されたので、避難する家族の多くは子どもとその母親および祖母からなる心細い集団で、そのことが後述の悪夢のような地獄の因になるのである。

上陸後の米軍の進攻は急で、2、3日もすると艦砲射撃に加えて太鼓の速打ちのような機関砲の音が身近に迫ってきたので、私たちは駆けるように南（首里）の方へ逃れたのであるが、その直前に近くに着弾

した砲弾で何人かが死傷し、そのなかに足に重傷を負った顔見知りの少年（十四歳）がいた。彼の怪我は子どもの目にも致命的で、二度と目をあてる事が出来なかった。彼の母親は彼をひとり塚に残し、幼児を負ぶってほかの小さな三、四人の子どもを引き連れて逃げる以外に為す術がなかった。後で聞いたところでは彼の足は布でぐるぐる巻かれ、側には少量の水と食べ物がお置かれてあり、……彼は小さい声で泣いていたという。恐らく想像を絶するような恐怖と苦痛が彼を襲ったにちががなく、私はその凄惨な地獄図を思う度に戦争を殊更に呪い、ヒューマニズムなるものに絶望するのである。彼の母親は戦後間もなく亡くなったが、思えば彼女も地獄の責めに苛まれ続けたにちががなく、それを思う度に胸が痛む。

二日後、なお首里（日本守備軍の要塞）へ移動中に、空からの無差別機銃掃射で腹部に致命傷を負ったのは二歳上の私の遊び友だちだった。呼吸する度に血が噴出していた。彼はサトウキビ畑のなかにひとり残され、顔面蒼白だった。彼もまた生きながらにして地獄を見たにちがくない。私は、子どもながらも、彼が早く息を引き取ることを願った。彼の母親は戦禍を生き抜くことはできなかったが、それはむしろ救いだったのかもしれない。

首里の丘陵地帯には一月以上とどまった。絶え間ない砲撃のなか、無数の遺体を跨ぎつつ、凄まじい爆裂音と雨とマラリアと飢えに苦しみながら、あろうはずもない安全地帯を求めてさ迷い続けた。魂の抜け殻のようになっていた私だが、母の背に負われた弟のやせ衰えた姿はあまりにも無残で悲しく、不条理な境遇を呪い続けた。栄養失調で極度に衰弱し、泣くことすらできなかった弟は後に難民収容所で息を引き取った。

五月の終わり頃には首里の守備軍は組織的な戦闘力を失い、本島南端の摩文仁への撤退を開始した。家屋はもとより草木までもが凄まじい「鉄の雨」と「鉄の暴風」で木っ端微塵に打ち砕かれ、すべてが跡形もなく抹消された裸の平地を軍と共に移動する無防備の住民は、米軍の無差別の砲撃と機銃掃射にさらされて多くのものが命を落とした。三日間の移動中の死者は民間人の犠牲者数を著しく押し上げたという。その頃の私は心身の極度の消耗でほとんど感覚麻痺の状態にあったが、そういうなかでも生涯忘れるこのできない光景を見た。幼児を負ぶって血だまりのなかにへたり込んでいる中年の母親（彼女の右わき腹に

は爆弾の大きな破片が深くくい込んでいたが「この子をたのむ、この子をたのむ」と必死に訴え続けていた。しかし、誰もそれに応える余裕などなかった。その光景が私の脳裏に焼きついて離れない。

思いもつかぬことだったが、かつては摩文仁の小さな一部落と思しい境地の所々に僅かに残っていた石垣の陰に三歳くらいの女児が立っていた。白っぽいワンピースにはどこどころ血が滲んでいて、顔にも痣のように点々と血がついていた。人々は雨のように降り注ぐ弾丸を避けて石垣の陰に身を伏せたりしていたが、その子は妙に落ち着いていて、黒い目でじっと正面を見て立っていた。六十八年が経った今も何かの拍子にその光景がかすかな罪悪感を伴って蘇り、その子があの後どうなったかどうかと幾度となく思うのである。無事であれば七十歳くらいになる。

南部の日本軍も米軍の圧倒的な戦力に掃討され、六月二十三日沖繩戦は終結した。犠牲者は二十万人に上り、そのうち十五万人は民間人で、それは当時の人口（六十六万人）の四分の一に相当した。私たちは最南端の喜屋武岬で米軍の捕虜となり、トラックで北部の難民収容所に移された。収容所ではほとんど毎日

のように筵で覆われた死体が手作りの担架で共同墓地に運ばれた。そのほとんどが餓死だった。私たちは奇跡的に全員が無傷で戦禍（四分の一の死の確立）をくぐり抜けてきたが、父は戦死、弟は栄養失調で亡くなった。ある朝、収容所の簡易宿泊所の一画で目を覚ますと、母が弟を抱いたまま身じろぎもせず、宙の一点を睨むように座り込んでいた。異様に思っていたら、長兄が「昌俊が死んだ」と呟くように言った。母は昼近くまで弟の亡骸を抱いていた、その情景が忘れられない。その母も阪神大震災の前日に八十五年の苦勞の生涯を閉じた。

十歳の私がおかれていた陰惨な状況（絶え間ない爆裂音、身近で死んでいく人々の断末魔の叫び、常につきまとう死の恐怖、降り続く梅雨のなかでのマラリアと飢えの苦しみ、衰弱しきった弟の姿を見る苦痛）は脳裏に生々しく焼き付けられて私にトラウマのような後遺症を遺しているが、それを文章に置き換えると途端に抽象化されてしまうのである。思うに、戦争の残酷さや悲惨さは筆舌に尽くせるものではなく、実際のインパクトを伝えることは不可能である。この拙文も私が受けた悲惨な衝撃の百分の一も伝え得てい

ると思えない。十歳で残酷な戦争を体験した私は、いかなる状況にあっても、戦争につながる可能性のある如何なる動きにも加担することは万が一にも、あり得ない。しかし、戦争を知らない世代の人たちは、この敗戦についての通り一遍の教育や語り伝えでは、《怖いもの知らず》の域を出ることはなく、一方、戦勝者の側では《怖いもの無し》の意識が高揚し、両者は自ずと戦争のサイクルをつくり出すのである。つまり、《戦争を体験しない限り、戦争の残酷さや空しさを骨身にしみて実感することはできない》というジレンマに陥ってしまうのである。くり返しのきかない、あるいはくり返してはならない体験（戦争体験）はほかの文化や技術と違って、正確に受け継がれるものではないからである。とはいえ、「仕方がない」で済まされることではもちろんない。諺に「微塵を積みみて山となす」・「千里の行も一步より起こる」とあるように、さまざまな形で反戦意識を反復喚起し、多くの人が至高の目標としての《不戦》の重要性を共感するよう努力を重ねる以外にないのではないか。それは決して容易なことではない。戦争回避がいかに大きなエネルギーを要する難題かを今にして思うのである。

追記（新たに加筆）

五年前に書かれた前掲の「沖縄戦」を改めて読んでみると、戦禍の記述がその真の凄まじさにいささかも迫るものではないことに無力感を禁じえない。

戦火に追われての逃避行中の苦難の日々が今でも鮮明に思い出される。まともな食べ物を口にしたのは初めのごく短期間で、用意していた食料（米・塩・干しいも・みそ・黒糖など）は極度に切り詰めつつも早い時期に（三週間位？）尽きた。その後は誰の所有とも知らない畑のサツマイモ、キャベツ、サトウキビなどで空腹をしのいだ。畑の作物が全難民の食糧源だったが、人々は常に銃火と砲火に追われるようにさ迷い続け一所に留まることはなく、それ故にこれらの作物が採り尽されることはなく、結果的にそれが多くの人々の命を救うことに繋がったという（長兄の述懐談）。しかし、それも長続きすることはなかった。ほとんどの畑は焼夷弾と砲弾で緑のない不毛の地と化したのである。私たちは黒焦げになったキャベツやサトウキビの芯の部分にわずかに残っている可食部をかじった。母はそういうものに加え、大事に取

ってあったらしい少量の生の米を咀嚼し弟に口移しで与えていた。その頃の飢餓の苦しみは堪えがたいものであった。ごくまれに敗走する日本軍が放置した食品（白糖、乾パン、缶詰など）にありつくこともあった。そんな時にも次兄はそっと自分の分け前を少し分けてくれた。

逃避行が始まって一月もすると梅雨と共にマラリアという呪わしい病魔に見舞われるようになった。絶え間なく耳をつんざくような砲声に脅え、飢えと降りしきる梅雨に濡れそぼって衰弱しきっている体をマラリアが襲うのであった―悪寒に始まり、高熱と非常に激しい震えが一時間くらい続く。なぜか弟と私は頻繁に襲われた。症状が現れると岩陰で私は毛布にくるまって横になり、両脇から二人の兄が過度の震えを和らげるように両手で押さえてくれた。弟が罹患すると、母は一時間も二時間も抱きしめていた。一旦罹患すると、症状は問歇的に繰り返されるので衰弱がひどく、歩くことさえ困難だった。私のマラリアの後遺症で家族の避難行動はしばしば制限された。一方、私が記憶する限り二人の妹はマラリアにもかからず実に健気で不満を言うこともなく祖母に手を引かれてもくもくと歩き、走った。砲弾が近くに着弾す

る度に気丈な祖母は二人に覆いかぶさるように伏せた。祖母はあるとき頭に傷を負い血を流したことがあったが、それは爆弾の破片ではなく、飛散してきた小石による軽傷だった。

音もなく何時どこから飛んでくるか分からない爆弾の破片が怖かった。横を歩いていた人が突然ウツという声と共に前のめりに倒れた。見ると、その人の背中に大きな破片が刺さっていた。至るところに転がっている死体の多くは（おそらく破片によって）体の一部を失っているか、あるいは大小の破片が食い込んだままになっていた。まれに無傷のまままで横たわっているもの、中には何かに寄りかかるように座った状態の死体もあったが、猛烈な爆風にやられたものらしかった。戦争も終わりに近いころ珍しく屋根のある民家（壁や戸は吹き飛ばされていたが）があつて、たくさんの方がそこで雨露を凌ぐために一夜を過ごしたのであるが、廊下の内側寄りを占めていた私より中の方に私と肩を並べて寝ていた人は朝起きてみると死んでいた、大きな破片が首に刺さっていた。個々ばらばらに廊下のここかしこに寝ていた家族は皆無事だった。血だらけになっていた私は家族の皆をびっくり仰天させた。この出来事を思い出す度に、私よ

り内側に寝ていた人を直撃した破片はおそらくかなり近くに着弾した砲弾から水平方向に飛散してきたものに違いないと思うのである。つまり当時私は近くで起きた爆発音に反応しない程に衰弱しきっていたということであろう。

降りしきる梅雨は必ずしも悪いことばかりではなかった。所々にある水源地はほとんど例外なく人の死体やその一部が浮いていて悪臭を放っていたので、私たちは容器に溜まった雨水やちよつとした水溜りや弾丸跡にたまった水を使ったが、体に下痢などの不調を来すことはなかった。もっとも頻繁に排泄するほどに物を口にすることもなかったし、ただ手足が極端に細くなり関節だけが妙に目立つようになっていた。

逃避行の道案内役の長兄（当時十五歳、旧制中学入学予定）が第一に心がけたことはへ最前線の日本軍の後方（南方）約一キロに位置取ることと（空からの機銃掃射の的にならぬように）大きな群れに加わらないことだった（長兄の述懐談）。しかし終戦後かなり後になって避難していた辺りを踏査したところでは首里の日本軍要塞との位置関係は当時の目論見と可成りかけ離れていたとも言っていた。ともかく

にも私たち家族は苛烈な戦禍（四分の一の死の確率）をくぐり抜けて全員無事に沖縄最南端の喜屋武岬にたどり着き、そこでアメリカ軍の捕虜となり、北部の収容所に送られた。しかしそこでは、既述のように、実に多くの人が主として飢餓に仆れた。

記憶の中の逃避行中の一コマ一コマは全て悪夢のような出来事であるが、一歳の弟（昌俊）のことを想うと断腸の思いに堪えない。逃避行の初めのころ母の背に負われていた弟は私が「こちよこちよ」といながら背中を軽くこそぐると体をくねらせて笑い、そのうちこちよこちよと言うだけで笑うようになっていた。時には私に顔を向けて目で誘うこともあった。しかし、時がたつにつれて梅雨に打たれ、マラリアと飢えで衰弱しきった弟は私のこちよこちよに無表情のまま一瞬細く目をあけるだけになり、しまいは全く反応しなくなった。やせ細った体はあまりにも無残で見るに堪えなかった。収容所では亡くなるまでほとんど目をつぶったまま横になっていた。生涯消えることのない苦痛にみちた記憶である。

不条理な運命に屈せず、筆舌に尽くせぬ苦難に堪え過酷な戦禍を生き抜いた祖母・母・長兄・次兄は、
今ももういない。二人の妹は現在ますます気丈、ただ末の妹はこのところ病気がちだがすこぶる明るい。
飢えとマラリアに苦しんでいた十歳の少年は現在後期高齢の八十三歳の老人となり、妻が日々整えてくれる食事を目の前にして時に胸が熱くなるのを禁じえないでいる。

2018年（平成30年）